

日语研究

第 9 辑

《日语研究》编委会 编

2013年·北京

图书在版编目 (CIP) 数据

日语研究. 第9辑/《日语研究》编委会编. —北京:
商务印书馆, 2013

ISBN 978-7-100-10118-9

I. ①日... II. ①彭... III. ①日语—研究—丛刊
IV. ①H36-55

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2013)第 158330 号

所有权利保留。

未经许可,不得以任何方式使用。

日 语 研 究

第 9 辑

《日语研究》编委会 编

商 务 印 书 馆 出 版

(北京王府井大街36号 邮政编码100710)

商 务 印 书 馆 发 行

印刷厂印刷

ISBN 978-7-100-10118-9

2013 年 月 第 版 开本 × 1/

2013 年 月北京第 次印刷 印张

定价: 元

《日语研究》编委会

主 编 彭广陆（北京大学）
副主编 林 璋（福建师范大学）
杨凯荣（日本东京大学）

编 委（按汉语拼音顺序排列）
陈访泽（澳门大学）
李庆祥（中国海洋大学）
马朝红（商务印书馆）
王亚新（日本东洋大学）
吴 侃（同济大学）
姚莉萍（对外经济贸易大学）
于 康（日本关西学院大学）
俞晓明（北京语言大学）
翟东娜（北京师范大学）
张佩霞（湖南大学）
朱春跃（日本神户大学）

秘 书 周 彤（北京科技大学）

本辑特约审稿人 王轶群（中国人民大学）

卷首语

本辑《日语研究》共收有特约论文 2 篇，投稿论文 11 篇，书评 4 篇，计 17 篇，内容涵盖词汇学、语法学、语用学、篇章语言学、话语语言学、日语教学及译介学等领域。

本辑的特约论文之一是由神戸市外国语大学教授、国立国语研究所客座研究员益冈隆志教授执笔的「日本語の恩恵構文をめぐって一構文意味論の観点から一」。益冈教授在其 1981 年及 2001 年研究成果的基础上，从构式语法的角度对日语中表示恩惠关系的“テアゲル句式”、“テクレル句式”及“テモラウ句式”重新进行了探讨。文章认为：这三个句式是从表示物品授受的句式衍生而来的。为此，句式保留了其组成部分的语义特征，如句式所表示的“恩惠”义即源于授受动词的语义；但同时应该看到，随着授受的对象由物品变为具体的事项（即通过给人做某事向某人施加恩惠，或由别人为自己做某事、从别人那里接受恩惠），授受动词的语义也随之发生虚化之后，部分句式也获得了由其组成部分无法推知的构式语义，如“テクレル句式”是使用频率极高的一种用法，既不表示物品授受，也不表示恩惠关系，而单纯表示说话人的“评价”这一主观态度。例如：「ようやく涼しくなってくれた」。值得注意的是，同样由表示物品授受的句式衍生而来的表示恩惠关系的“テモラウ句式”却不具备这样的功能，这反映了它们在语法化程度上的差异。

本辑的特约论文之二是由筑波大学桥本修副教授执笔的「外の関係における制限的／非制限的連体修飾節」。连体修饰是近来日语语法研究的重点之一，日本国立国语研究所也正在开展有关连体修饰的类型学研究。在这样的大背景下，文章着眼于日语的本体现象，对日语连体修饰小句研究的基本概念——内在关系和外在关系、限制性和非限制性及它们之间的关系进行了重新审视。一直以来，对表示内在关系的连体修饰小句讨论得比

较充分，它存在限制性（即连体修饰小句在内容上对它所修饰的名词具有限定作用）和非限制性（即连体修饰小句在内容上对它所修饰的名词不具有限定作用）两种情形已经成为一种共识。但对于外在关系的连体修饰小句是否同样存在限制性和非限制性两种情形却很少有人提及。文章先根据时贤研究将外在关系分为两类，即同格连体修饰小句和相对连体修饰小句，指出后者与前者及内在关系的连体修饰小句呈现出不同的特征：连体修饰小句对它所修饰的名词具有限定作用，即只存在限制性一种情形。为保证这一观点的客观性，文章通过添加定指成分「その」以及考察连体修饰小句的时制特征等测试手段，证实了相对连体修饰小句中并不存在非限制性小句。至于相对连体修饰小句为何只存在限制性一种情形，文章分析为此类句中的被修饰名词具有不饱和性，需要连体修饰小句从内容上对其进行补足才能明确其外延。这与三宅（1993）中“被修饰名词不具有定指性时，也就无从对其进行描述（非限制性），因此连体修饰小句只能是限制性的”的分析可谓互为表里。外在关系的连体修饰小句是较具日语特色的语言现象，对相关现象的分析及基本概念意义的探讨将有助于更好地通过与其他语言的比较挖掘出更多的特质。

本辑收入了1篇词汇学方面的论文。

陈力卫的〈近代中日概念的形成及其相互影响——以“民主”与“共和”为例〉从中日语言交涉史的角度考察了“民主”、“共和”二词的形成及其概念变迁。19世纪中期在接受和对应西方概念时，中国使用“民主”，日本使用「共和」。19世纪后半期，“民主”一词进入日语，与「共和」语义接近。19世纪末，汉语里也导入了“共和”。至此，汉语和日语中都可可见“民主”和“共和”共存，且都开始形成意义分化：汉语中的“民主”偏重用于对应 democracy；日语中也倾向使用「民主主義」或音译词「デモクラシー」来对应 democracy，与表示政体的「共和」及“共和”相区分。20世纪初，汉语导入“民主主义”一词，“民主”及“共和”也彻底完成了意义分化，即前者对应 democracy、后者对应 republic。二词的中日概念形成及其相互影响是“中日类义词的意义互补”模式的具体体现。

语法学方面的论文有3篇。

李光赫、张建伟的〈从期待性看日语和汉语的条件句〉从前提条件和必要条件的角度对日语条件句和汉语条件句进行了考察，指出日语中的「ト条件句」、「タラ条件句」和汉语中的“p, 就 q”条件句偏重于跟前提条件相联系；而日语中的「バ条件句」和汉语中的“p, 才 q”条件句偏重于跟必要条件相联系。表示必要条件时，正句（主句）一般不出现非期待性内容，而表示前提条件时，没有这种限制。从〔1. 期待性 2. 偏句是焦点 3. 寻求正句成立所需的条件〕这三点来看，必要条件与可能句逻辑结构相似。这可以解释为什么日语中的「バ条件句」正句多出现可能句、汉语中的“p, 才 q”条件句经常与能愿动词搭配等现象。

姚艳玲的〈日汉语“位移事件”表达式的对比研究〉是关于日汉语位移事件表达式的实证研究，文章通过调查对译语料库，对类型学研究中所指出的位移事件表达中存在“汉语多用方式动词，而日语多用路径动词”的使用倾向这一观点进行了实证，并据此主张在位移事件的表达形式上，日语基本属于“动词框架语言”，而汉语基本属于“卫星框架语言”。

陈燕青的〈トコロヲ小句的句法功能及ヲ的性质——从语法化角度看〉从语法化的角度，对「トコロヲ」的句法功能及性质进行了分析和考察。文章指出本来作为宾语成分的「トコロヲ」经过重新分析后首先变为连用修饰成分，然后再由连用修饰成分重新分析为从句。而这三种不同的语法功能具有连续性，并存在语法化程度逐渐递增的趋势。虽然要找出区分这三种功能的绝对标准并不容易，但论文通过一系列的测试，对不同的功能和用法做出了合理和有效的区分。

语用学方面的文章有 1 篇，侧重探讨学术用语的规范性。

毋育新的〈语用学“face”与中日两语言中的“面子”概念辨〉将 Brown&Levinson 的礼貌策略理论的核心概念“face”与中日两语言中的“面子”概念进行了比较，指出它们的内涵并不相同。前者表示一种心理欲求，属于语用论的范畴；而后者表示一种道德规范，属于文化范畴。文章建议在汉语和日语中确立一个与 Brown&Levinson 的“face”对等的概念“face 2”作为语用学专用术语来讨论相关问题，以避免概念意义的不对等或认识不清而引发不必要的学术争论。

篇章及话语语言学方面的文章共3篇。

刘雅静的〈试论「ダ」在日语语篇中的功能〉首先指出日语中的判定词「ダ」在语篇中位置的多样性，具体包括句末、从句中、话轮之首、「文節」之后以及语气表达完整的句子之后。在此基础上，论证了「ダ」具有“命题表述功能”、“命题断定语气功能”及“态度断定语气功能”，并指出这几种功能之间具有关联性，即其本质含义都是“表示事情或事态正是如此”。

刘焜的〈基于话语模型理论分析日语文脉指示词「この」和「その」的选择原理〉首先用具体实例证明关于指示词「この」「その」的选择原理迄今为止的研究尚缺乏足够的说服力，主张要解决这一问题不能停留在语篇层次。文章立足于话语层次，以话语模型理论为理论框架，对新闻报道、哲学书籍、文学书籍、日常会话四种话语类型中的「この」和「その」的使用及其分布进行了分析，将指示词的文脉指示分为对立型和融合型两种模式，并分别总结了在不同模式下「この」和「その」的选择原理，对本文所考察的现象进行了统一的说明。

周彩华、赵刚的〈集体讨论场面中协作发话的汉日对比研究〉对汉语和日语集体讨论中的协作发话进行了考察，并将二者的异同点总结为以下三点：1. 汉语集体讨论多用优先型、添加型发话；日语集体讨论多用复述型、同感型协作发话；2. 日语集体讨论多使用元语言进行会话管理；汉语集体讨论多添加信息或促使对方发言，完成协作发话；3. 二者均观察到了由三人以上合作完成的协作发话。据此，文章认为：1. 日语的协作发话“接受对方信息”的特征较为显著；而汉语的协作发话“与对方相互提供信息”的特征较为显著；2. 日语集体讨论具有“重视调节讨论场面和气氛”的特征；汉语集体讨论具有“重视完成课题”的特征；3. 汉语和日语集体讨论均采用积极礼貌策略。

日语教育方面的论文有1篇。

张金龙、张璇、李友敏的〈我国日语专业学生对日本人的定型印象及其成因分析——兼谈日语学习对学生的日本人定型印象的影响〉对河北省2所大学日语专业的189名学生采用问卷调查的形式调查分析了他们所持有的日本人印象、其形成原因及了解日本人的主要信息来源，并从日语学习

与学生对日本人“定型印象”的形成之间的关系方面总结了日语学习影响学生对日本人印象的主要方式及具体影响内容。

译介学方面的文章有 2 篇，这 2 篇文章都选择了《红楼梦》作为分析文本。

赵秀娟的〈同叙秋窗意 别样风雨情——关于《秋窗风雨夕》日文译文的比较〉使用文学作品的文本探讨翻译策略的问题，即翻译中的归化与异化问题。文章认为松枝茂夫的“汉文训读体”译本在最大程度上保留了古诗原貌；伊藤漱平的译本在保留部分原词表达的同时尽可能以日语中的固有语言表达来替代原诗中的汉语词；永井荷风的译本则是结合自身对诗歌的理解，以近代翻译西方诗歌的形式对原文做出独特诠释。

张胜男的〈古典诗歌翻译中的形意之争——以《葬花吟》三个日译本为中心〉着重探讨诗歌这一特殊文学体裁的翻译策略问题，即翻译是重形式、文化意象还是诗歌意境。文章认为松枝茂夫译本“重意弃形”、伊藤漱平译本“兼顾形与意平衡”、饭塚朗译本“重形薄意”，三者都为汉诗日译提供了学习与借鉴的意见。

本辑还收录了 4 篇书评，分别是：卢万才评介毋育新著《日汉礼貌策略对比研究》；朴贞姬评介王轶群著《日汉空间表达对比研究》；盛文忠评介孙海英著《汉日动词谓语类非限制性定语从句对比研究》；徐曙评介冷丽敏著《高等教育中的日语教育教学研究——引发学生自主参与课堂的教师行为》。书评能使我们学术同仁及时了解学界动向及最新研究成果，我们希望今后还能继续看到更多的高质量的书评出现在《日语研究》上。

《日语研究》编委会

2012 年 6 月

目 录

特约论文

日本語の恩恵構文をめぐる

—構文意味論の観点から—…………… 益冈隆志 (1)

外の関係における制限的 / 非制限的連体修飾節…………… 桥本修 (17)

论 文

语用学“face”与中日两语言中的“面子”概念辨…… 毋育新 (30)

集体讨论场面中协作话语的汉日对比研究…………… 周彩华 赵刚 (47)

基于话语模型理论分析日语文脉指示词「この」和

「その」的选择原理…………… 刘 焱 (66)

从期待性看日语和汉语的条件句…………… 李光赫 张建伟 (91)

日汉语“位移事件”表达式的对比研究…………… 姚艳玲 (108)

试论「ダ」在日语语篇中的功能…………… 刘雅静 (122)

トコロヲ小句的句法功能及ヲ的性质

——从语法化角度看…………… 陈燕青 (138)

近代中日概念的形成及其相互影响

——以“民主”与“共和”为例…………… 陈力卫 (154)

我国日语专业学生对日本人的定型印象及其成因分析

——兼谈日语学习对学生的日本人

定型印象的影响…………… 张金龙 张璇 李友敏 (177)

古典诗歌翻译中的形意之争

——以《葬花吟》三个日译本为中心…………… 张胜男 (200)

同叙秋窗意 别样风雨情

——关于《秋窗风雨夕》日文译本的比较…………… 赵秀娟 (215)

书 评

评毋育新著《日汉礼貌策略对比研究》…………… 卢万才 (229)

评孙海英著《汉日动词谓语句类非限制性定语从句

对比研究》…………… 盛文忠 (237)

评王轶群著《日汉空间表达对比研究》…………… 朴贞姬 (243)

评冷丽敏著《高等教育中的日语教育教学研究

——引发学生自主参与课堂的教师行为》…………… 徐 曙 (251)

编者后记…………… (265)

《日语研究》(全9辑)后记…………… (267)

英文目录…………… (269)

《日语研究》以往各辑目录…………… (271)

日本語の恩恵構文をめぐって

—構文意味論の観点から—

益岡隆志（神戸市外国語大学・国立国語研究所客員）

摘要 本文将从句结构语义论的角度研究考察日语恩恵句（テアゲル（テヤル）・テクレル・テモラウ结构句）。研究将立足于授受句中的“物”（モノ）经过语义扩张在恩恵句中转换为“事”（コト）这一基本观点。通过立足于扩张机制考察恩恵句得以探明：（i）授受动词“アゲル（ヤル）・クレル・モラウ”自身所附带的恩恵义在恩恵句中得到扩张和延续；（ii）テクレル恩恵句（即视点在恩恵受益方的结构句）中内含对事态进行评价的特征性语义功能；（iii）同属受益句のテクレル结构句与テモラウ结构句二者对立并存，但显见二者功能扩张程度不同，这也是日语恩恵句值得关注的特征。

キーワード コト拡張 全体的意味 視点 受益 機能語化

1. はじめに

本稿では、日本語の特徴的な構文の事例として恩恵構文（benefactive constructions）を取り上げたいと思う。日本語文法における恩恵構文の認定と位置づけは松下（1928、1930）に始まるが、それに続く佐久間（1936）と併せ、日本語の恩恵構文の研究は日本語研究における先駆的貢献として注目される。

日本語の恩恵構文の研究は、現代共通語を対象とする研究（山田

2004、楊 2008 など)、文法史・方言文法の観点からの研究(古川 1995、日高 2007 など)、対照研究・類型論研究としての研究(Shibatani 1994、1996 など)といった多方面からの研究の蓄積があり、その意味において、アスペクト研究と並んで総合的な研究が推し進められている研究課題であると言える。このように、恩恵構文に対しては多様なアプローチの可能性が考えられるが、本稿では、筆者の最近の関心である構文の意味分析(筆者は「構文意味論」と称している)の観点から考察を試みることにする。

筆者は日本語の恩恵構文について、かつて Masuoka (1981)、益岡 (2001) で私見を述べる機会があった。本稿はその続編である。筆者が現在取り組んでいる構文意味論の原点は Masuoka (1981)、益岡 (1984) であり、恩恵構文の研究はその最初の試論であった。本稿は、筆者が構想する構文意味論において重要な位置を占める恩恵構文に関する筆者の現在の考えを示そうとするものである。

本論は以下のように構成される。まず 2 節で、日本語の恩恵構文に「コト拡張」がどのように関係するかを述べる。続く 3 節で、「恩恵」と「受益」の関係を踏まえテクレル構文の意味の特異性を説明する。そして 4 節では、テモラウ構文をテクレル構文と比較し両者の異同を明らかにする。最後の 5 節は全体のまとめである。

2. 恩恵構文とコト拡張

2.1 補助動詞構文

周知のとおり、日本語には動詞が先行の動詞を補助する構文—言い換えれば、動詞が機能語化する構文—がある。「ある、いる、おく、いく、くる、やる(あげる)、くれる、もらう、しまう、みる、みせる」などが補助的動詞として機能するこのような構文を「補助動詞構文」と呼ぶ^①。

補助動詞構文では、元になる動詞の構文(「本動詞構文」と呼ぶ)における名詞の部分が動詞(動詞句)に置き換えられる。名詞(モノ)が動詞(コ

① 補助動詞構文については、益岡(1992)などを参照されたい。

ト)に置き換えられることを、本稿では、益岡(2007)に従い「コト拡張」と呼ぶことにする。コト拡張の例として次の(1)(2)を見てみよう。

(1) イチローはジローに写真を見せた。

(2) イチローはジローにピアノをひいて見せた。

この例では、「写真」という名詞から「ピアノをひく」という動詞(動詞句)へのコト拡張が認められる。

コト拡張によって本動詞構文から補助動詞構文に移行するとき、補助動詞構文の意味は、本動詞(本動詞構文)の意味特徴を受け継ぐかぎりにおいては構成的意味の枠内にあると見ることができる。その一方、構文レベルに現れる構文特有の意味(本稿では、「全体的意味」と仮称する)が認められる場合、その意味は構成的意味とは別に取り扱う必要がある。構文の意味には、したがって、構成的意味の部分と全体的意味の部分があるということになる。本稿では恩恵構文を対象に、構文の構成的意味と全体的意味について考えてみたい。

考察を始める前に、まず日本語の恩恵構文がかかわる授受動詞の体系を確認しておこう。広義の授受動詞は「与える」「受け取る」など多数の動詞を包含するが、恩恵構文がかかわる授受動詞は「アゲル(ヤル)・クレル・モラウ」という3項体系を構成する。「やりもらい動詞」という名称が慣用的に成立していることから分かるように、広義の授受動詞のなかで「アゲル(ヤル)・クレル・モラウ」という3つの動詞は、文法的に特別な意義を有する動詞の類(クラス)である。以下では、特に断らないかぎり、「授受動詞」という名称は「アゲル(ヤル)・クレル・モラウ」に限定して用いることにする。

2.2 授受構文から恩恵構文への拡張

日本語の恩恵構文は、授受動詞「アゲル(ヤル)・クレル・モラウ」を述語とする本動詞構文(授受構文)から拡張したものと捉えることができる^①。この場合、モノからコトへという拡張において、授受動詞の

① 授受構文から恩恵構文への拡張と、それに関連するモノの授受とコトの授受のあいだの連続性については、楊(2008)を参照のこと。

意味特徴が恩恵構文に受け継がれるという点に留意する必要がある。

その受け継がれる意味特徴とは、授受動詞に宿る恩恵性 (benefactivity) である。恩恵構文における恩恵性の源泉は、授受動詞「アゲル(ヤル)・クレル・モラウ」に求められるということである^①。アゲル(ヤル)・クレル・モラウは、恩恵性を宿す点で広義の授受動詞のなかで特異な存在となる。

授受動詞は次の(3)～(5)に示されるように、与え手と受け手のあいだでのモノの授受を表す。

(3) あんたには特級酒を二本さしあげたはず。(水上勉『文壇放浪』)

(4) 月に一度手紙をくれた。(司馬遼太郎『街道をゆく』)

(5) とうとうあきらめて、フランス語で話したおかげで、食べ物と酒とベッドをもらった。(大江健三郎『あいまいな日本の私』)

「与える」、「受け取る」のような一般の授受動詞が単なるモノの授受を表すのに対して、アゲル(ヤル)・クレル・モラウはモノの授受に恩恵の授受が伴うことを表す。この点は、次の(6)と(7)の許容度の違いにより確認される。

(6) 督促状を受け取った。

(7) ? 督促状をくれた。

(7)の例が許容されるには、督促状を受け取ることから当事者(話し手)が恩恵を受けるという特殊な状況が必要である。

アゲル(ヤル)・クレル・モラウに恩恵性が宿るところから、「与える」・「受け取る」のような一般の授受動詞に対して、これらの授受動詞は「恩恵性授受動詞」とでも名づけることができる。アゲル(ヤル)・クレル・モラウという恩恵性授受動詞は、〈モノの授受+恩恵の授受〉という意味特徴を内在させているということである。

恩恵構文はこの意味特徴を受け継ぐことになる。すなわち、恩恵構文はコト拡張により、授受動詞の〈モノの授受+恩恵の授受〉という特徴

① この点については、益岡(2001)を参照されたい。

を〈コトの授受 + 恩恵の授受〉という形で受け継ぐわけである。授受動詞「アゲル(ヤル)・クレル・モラウ」を補助動詞として用いる恩恵構文を、関係する授受動詞の違いに基づき「テアゲル(テヤル)構文」・「テクレル構文」・「テモラウ構文」と呼び分けることにしよう。以下に、これら3つの構文の例を挙げておく。

(8) ソファが一つしかないが、床に今、薄縁でも敷いてあげるから。

(三島由紀夫『絹と明察』)

(9) 正しい知識が普及していないことで、福島県から県外に避難した子どもたちがいじめられることなどが心配されており、正確な知識を伝えるために活用してもらおうという。(朝日新聞 2011/08/14)

(10) その後、図書館の司書が…『御伽草子』を貸してくれた。(司馬遼太郎『街道をゆく』)

授受動詞「アゲル(ヤル)・クレル・モラウ」の意味特徴を受け継ぐ(8)～(10)のような「テアゲル(テヤル)構文」・「テクレル構文」・「テモラウ構文」は、「恩恵性補助動詞構文」とでもいうべき構文である。これらの恩恵構文は、授受動詞の意味特徴を受け継ぐかぎりにおいては、構文の意味を構成的に捉えることができる。すなわち、これらの構文の意味は構成的意味の枠内で取り扱うことができるわけである。

このように、恩恵構文の意味を考えようとするとき、コト拡張という観点の有効であることが分かるのであるが、コト拡張ということに関連して補足説明を要する点がある。それは、恩恵構文とコトの授受の関係のあり方である。先ほど、恩恵構文は授受動詞の意味特徴を〈コトの授受 + 恩恵の授受〉という形で受け継ぐと述べたのであるが、実際には、コトの授受が関与しない場合もある。ここでは、コトの授受が関与する場合としない場合の違いが顕著に現れるテクレル構文のケースを見ておこう。

まず、恩恵の授受にコトの授受が伴っている場合であるが、その例としては先に挙げた(10)が該当する。(10)の例においては、恩恵の受

け手である話し手は同時に『御伽草子』を貸すという動作の受け手でもある。そこでは、『御伽草子』を貸すというコトの授受が関与している。

それに対して、恩恵の授受にコトの授受が伴わない場合もある。次の(11)の例を見ていただきたい。

- (11) 文庫本の『夕べの雲』に署名をしてさし上げたら、大へんよろこんでくれたということがある。(庄野潤三『けい子ちゃんのゆかた』)

この場合、「大へんよろこんでくれた」という表現における恩恵の受け手である話し手は、人が喜ぶというコト自体には関与していない。このタイプのテクレル構文は、もっぱら恩恵性を表すという意味において、いわば純粋な恩恵構文であるとも言える。このタイプの恩恵構文の意味には、構成的意味の枠を超える面が認められる。以下、節を改めてこの点を詳述したい。

3. テクレル構文の意味

3.1 与益と受益

日本語の授受動詞の一大特徴は、“give”に当たる動詞が「アゲル(ヤル)」と「クレル」に分かれている点である。このような語彙の分化は他言語にはほとんど見られない。

アゲル(ヤル)とクレルは主語・目的語といった文法関係を基軸に考えれば、どちらも与え手が主語であるという点で「授与動詞」である。両者の違いがどこにあるかと言えば、周知のとおり、視点の置き方の違いということになる。すなわち、アゲル(ヤル)は与え手に視点が置かれ、クレルは受け手に視点が置かれる^①。そこで、視点を基軸に捉え直せば、アゲル(ヤル)は与え手に視点が置かれるという点で「授与動詞」、クレルは受け手に視点が置かれるという点で「受納動詞」ということになる。

① 授受動詞と視点の関係については、大江(1975)、久野(1978)など数多くの研究で論じられている。